音楽映像メディア（CD＆DVD）

山崎 浩太郎

・新譜の発売点数

日本レコード協会のサイト掲載の「新譜数推移」（https://www.riaj.or.jp/f/data/others/sp.html）の2024年の項によると，所属の正会員，準会員，賛助会員計66社の2024年発売の新譜のなかで，クラシック音楽は12cmCDの邦盤４,361のうち101，洋盤２,141のうち751，合計すると６,502のうち852で，全体の約13％を占めた。昨年は６,468のうち616で約10％だったので，全体の新譜が微増なのに対しクラシックは22％増加し，全体に占める割合も３％増加した。

また，レコード店のHMV&BOOKS onlineのサイトでは，2024年のCD，SACD，DVD，ブルーレイ・ディスク，LPの発売数を見ることができる（https://www.hmv.co.jp/search/adv_１/genre_VARIOUS_700/keyword_the/year_2024/）。HMVが扱わないディスクもあるので概数でしかないが，クラシックの総数は約５,600。うち国内盤は約１,500で，輸入盤がその２.７倍の約４,100となる。そのうちCD約４,700，SACD約370，DVD約130，ブルーレイ・ディスク約130，LP約220。国内盤が増えたぶん輸入盤が減り，総数は昨年とほぼ同じ。フォーマットの割合もそれほど変わらなかった。

・日本のアーティストのCD

YouTubeでスターとなった角野隼斗がソニークラシカルと３月にワールドワイド契約を結び，辻井伸行もドイツ・グラモフォン（DG。日本ではユニバーサルミュージックから発売されている）とグローバル専属契約を４月に結んだ。2021年にソニークラシカルとワールドワイド契約を結んだ藤田真央に続き，国内で高い人気と動員力を誇る日本の若いピアニストが，メジャー・レーベルから全世界に新譜をリリースする，明るい話題となった。角野は世界デビュー・アルバム「Human Universe」を10月に発売し，辻井はベートーヴェンのハンマークラヴィーア・ソナタをメインとするアルバムを11月に日本先行発売した。

その辻井は，これまでエイベックスから約15本の旧譜アルバムをリリースしていたが，これらは，国内のCDはそのままエイベックスから流通し，配信ではDGから再リリースする形態となるという。

また，2023年にDGと専属契約を結んだ作曲家の久石譲は，同年発売のジブリ映画作品集『A Symphonic Celebration』は，海外ではクラシック音楽，国内ではJ-POPやアニメ音楽と分類が異なっていたが，2024年の第２弾『JOE HISAISHI IN VIENNA』は交響曲がメインのため，国内でもクラシック扱いとなった。

指揮者の録音では，２月に没した小澤征爾の追悼盤がある。ベルリン・フィルとのライヴ録音・録画７枚組のボックスが，ベルリン・フィルの自主制作でキングインターナショナルから11月に発売され，初登場の音源がほとんどということもあり，ベストセラーとなった。

その小澤の指名でセイジ・オザワ 松本フェスティバル首席客演指揮者に就任した新鋭沖澤のどかは，CDでも活躍した。2023年末に日本コロムビアが発売した読売日本交響楽団とのシベリウスの交響曲第２番に続いて，ブラームスの交響曲第１番&第２番が，ユニバーサルミュージックからデッカ・レーベルで12月に発売された。これはアンドリス・ネルソンスの代役として，サイトウ・キネン・オーケストラを急遽指揮して大好評を博したコンサートのライヴ録音である。

小澤の偉大な遺産というべきこのオーケストラでは，ジョン・ウィリアムズがステファヌ・ドゥネーヴと分担して自作を指揮した2023年のライヴ録音『John Williams in Tokyo』も，CD，SACD，LP，ブルーレイ・ディスクなどさまざまなフォーマットでリリースされて人気を博した。

ほかにオーケストラ録音では，オクタヴィア・レコードのエクストン・レーベルが今年も旺盛にリリースした。長く好調を続けるジョナサン・ノットと東京交響楽団のコンビはブルックナー，マーラー，チャイコフスキーの交響曲を５点，引退前の１年を精力的に走り回った井上道義も３つとのオーケストラとのブラームスの交響曲全集など３点，飯森範親と日本センチュリー交響楽団のハイドン・シリーズ３点，ほかに九州交響楽団の首席指揮者就任を記念した太田弦から，川瀬賢太郎，沼尻竜典，大友直人，小林研一郎，久石譲，指揮者生活60周年を祝った秋山和慶まで，それぞれが縁の深いオーケストラとのライヴの熱演を世に問うていて，壮観である。

弦楽器奏者では，ブラームスのヴァイオリン・ソナタ全集を諏訪内晶子，三浦文彰，辻彩奈の３人が，偶然にも競作したのが目をひいた。チェロの宮田大も，原田慶太楼指揮の東京交響楽団とのチェロ協奏曲『ケンタウルス・ユニット』など吉松隆の作品集，ギターの大萩康司とのアルバム『atlier』の２点を日本コロムビアからリリースし，人気と実力の高さを示した。

ピアニストでは，前述の藤田，角野，辻井のほか，日本デビュー20周年の河村尚子による愛奏曲集『20 -Twenty-』が，その好調ぶりを示す１枚となった。

・海外のアーティストのCD

現役のアーティストでは，なんといっても指揮者のクラウス・マケラの活躍がきわだっている。パリ管弦楽団とのストラヴィンスキー，オスロ・フィルとのショスタコーヴィチ，ヴァイオリンのジャニーヌ・ヤンセンと共演したシベリウスとプロコフィエフ，デッカから発売された３点がベストセラーとなっている。

ベテランでは，サイモン・ラトルがバイエルン放送交響楽団とロンドン交響楽団を指揮したライヴ録音が人気を博した。メジャー・レーベルではなく，放送局やオーケストラのレーベルの制作であるのは，いかにも21世紀らしい。

ほかに，ピアニストのユジャ・ワン，イゴール・レヴィットなどから，ベテランのエリーザベト・レオンスカヤ，３月に亡くなったマウリツィオ・ポリーニの最後の録音などが，特に目をひいた。

フランスのハルモニア・ムンディ，ヴェルサイユ宮殿，アルファなどのフランスのレーベルは，今年も古楽などの意欲的なアルバムを多数制作した。

・映像ソフト

なによりもオペラの舞台公演が中心となる。ソプラノのアスミク・グリゴリアンが，《蝶々夫人》《マクベス》《ルサルカ》など，コヴェント・ガーデンやザルツブルク音楽祭という檜舞台での憑依的な熱演で大活躍した。日本人のものでは宮城聰が演出を担当し，マルク・ミンコフスキの指揮でベルリンで上演された『ポントの王ミトリダーテ』が話題となった。

山崎浩太郎（やまざき・こうたろう）

1963年東京生まれ。演奏家の活動と録音をその生涯や同時代の社会状況において捉えなおし，歴史物語として説く「演奏史譚」を専門とする。「音楽の友」「モーストリー・クラシック」「ぶらあぼ」「レコード芸術ONLINE」などに寄稿し，日本経済新聞に演奏会評を執筆。著書は『演奏史譚1954/55』（アルファベータ），片山杜秀さんとの『平成音楽史』（アルテスパブリッシング）など。